



興 照 寺 報

平成26年11月

55号



発行 浄土真宗 興 照 寺
〒890-0045 鹿児島市武一丁目25番12号
電話 **099-254-3269** (代)FAX 099-254-0303



吹上の浜田橋から見た夕日

一面 蝸ノ記
二面 還暦を迎えて思うこと(Ⅱ)
三面 秋季彼岸・永代経法要のお話
四面 報恩講のお知らせ 平成二十七年のご法事等

「蝸ノ記」

直木賞の小説で現在上映中の映画の題名であります。ある罪を問われ家譜編纂と十年後の切腹を藩から命じられた武士の日記で、(夏がくるとこのあたりではよく蝸が鳴きます。とくに秋の気配が近づくと、夏が終わるのを哀れむかのような鳴き声に聞こえます。それがしも、来る日一日を懸命に生きるの上でござれば、日暮らしの意味合いを込めて名づけました。)「蝸ノ記」の由来を本文に書かれています。死を定められた武士と言うだけでなく一人の人間としての生きざまの物語であります。

本文は爽々とした日々が流れています。死、去ると決まった以上はその日に向けて人としてどう生きるのかが肝心で、その一点から真価は定まる。しかし一方で(未練がないと申すは、この世に残る者の心を氣遣うておらぬと言っておるに等しい。この世をいとらしい、去りとうない、と思うて逝かねば、残された者が行き暮れよう)と家族への切ない思いを吐露しています。

勿論、私共は死ぬ時を定められている訳ではありません。しかしその時はいつの日か必ずやってきます。私は小説を読みながら松尾芭蕉の(赤々と 日はつれなくも 秋の暮れ)という句を何故か思い浮かべて改めて空蟬の世の哀れさを噛み締めました。

去年から家内の母を我が家で看るようになりました。八十七歳、おしゃべりの好きな人で、私たちが家族の会話に積極的に入ってきません。耳が遠くなってきたこともあって、周りの人の話を聞くことよりも自分で話す事の方が近頃一段と多くなりました。話がかみ合わないことがたびたび起こります。

同じ話の繰り返しもしょっちゅうです。義母の老いた様子を感じながら、最初の頃はその都度相手をしていましたが、半年過ぎた頃から適当に相手をするようになってきてしまいました。義母は自分に構ってほしい。私は自分のことを優先して十分な対応ができない。時として冷たく接してしまう自分がいて、自分で自分がいやになることがあります。実母の時にも似たようなことがありました。亡くなる前、二年近く一緒にいましたが、我が母には余計感情的になってしまいました。ある日、一緒にどこかへ出かけようとしていた時、母の準備が遅くて「何をしているのね。早くせんね。」と強い口調で叱責してしまいました。母は「そんなに言わないでよ。あんたも歳を取ってきたらわかるのよ」と悲しそうな顔で言いました。自分自身の中に老いを感じる

こともですが、周りの人から老いについて教えられ、学ぶことが多々あります。自分の老いをしっかり受け止め、そして周りの人の老いに寛容でありたいと思っております。

寺報五十二号「開祖の亡くなった年齢」で五木寛之氏の講演を紹介しました。「キリスト教は青春の宗教、イスラム教は壮年の宗教、仏教は老年の宗教と言えないだろうか。キリストは三十代で亡くなり、ムハンマド（マ

還暦を迎えて思うこと(Ⅱ)

ホメット)は六十代で亡くなり、釈迦は八十歳で亡くなった。宗教には開祖の亡くなった年齢なりの思想がある。」なるほどと思いました。お釈迦様は高齢に達したからこそ人生の無常と苦(生老病死)を説いてくださった。親鸞聖人は八十九歳まで生きられ、年齢を持って言える多くの言葉を残されました。老いと向き合ってください。老いの言葉に共感を覚えます。「老い」を考えることは、「生死(いのち)」を考えることに通じると

思います。親鸞聖人は、「老い」を通して「生死(いのち)」をしっかりと見つめてこられました。老いとともについて終わっていく「いのち」と向き合い、本願力を糧にした生き方を実践されました。救われていく「いのち」を確信し、歓び、感謝に満ちた生き方を実践されました。

五木寛之氏が編集された「うらやましい死に方」という本があります。その中で、五木氏は「人の死にもともと良い死・悪い死など

ない。死に対して、恐れたり、触れるのを避けたりするのはなく、多くの人の死を通して、己の死・己の生き方を学んでいかなくてはいけない」と述べています。二十二年前、祖母が九十四歳で往生しました。亡くなる前の日、病室に家族を呼び、一人ひとりに「お世話になりました。ありがとう」と感謝の言葉を述べたあと、「そろそろおじいさん(三十年前亡くなった自分の旦那さん)の所へ往かんなら。」と安心した穏や

かな表情を浮かべて往生していきました。自分の部屋のベッドの下には、きれいにたたまれた死に装束が用意されていました。

「生死(いのち)」に対する日頃の姿勢が自分の死に方につながっていくのではないかと私は常々思っています。私たちのいのちは今、仏様の願いに包まれていきます。仏様の願いによって間違いない救われていく身です。

浄土真宗の生活信条

一、み仏の誓いを信じ 尊いみ

く生き抜きます。

一、み仏の光をあおぎ 常にわが身をかえりみて 感謝のうち励みます。

一、み仏の教えにしたがい 正しい道を聞きわけて まことのみのりをひろめます。

一、み仏の恵みを喜び 互いにうやまい助け合い 社会のために尽くします。

還暦を迎えて、「老い」について、「死」について、改めて思いを巡らせてみました。



秋季彼岸法要

講師 篠部 洪紀 先生

鹿児島ではあまり見かけませんが広島の方ではお墓に「俱会一処」と書いてあります。仏説阿弥陀經の「諸上善人 俱会一処」からきています。ともに一所に会うと言う事です。お念仏をより所にする人は、今生での別れはあってもまたお浄土で合わせていただけるといふ事です。

星影のワルツの替え歌に

「別れることは 辛いけど
仕方がないんだ 世の定め
寂しい夜空に 涙が光る

両手合わせてみ仏を
両手合わせてみ仏を

一人じゃないんだ 親がいる」と言うのがあります。親とは南無阿弥陀仏さまです。我々はたったひとりて死んでいくのです。誰も変わってはくれません。誰も一緒に行ってくれません。しかし、いつも阿弥陀様がともにあってくださいます。

我々はどこに向かって生きていくかを考えなければならぬ時が必ず来ます。死に向かっていく我々が阿弥陀様に救われて浄土に生まれ、仏と成らせていただくみ

教えを聞き、考えてください。

「往生浄土」と言う言葉がありますが、行き詰る事を往生すると言いますが間違った使い方です。お浄土に行き、生まれる事を言うのです。生まれて仏にならせていただくのです。

仏様に手を合わせる。両手を合わせることは尊いように見えます。しかし、自分の幸せの為に神や仏を利用していこうという手の合わせ方もあります。

仏になるといふ事は煩惱を絶つて、悟りを得る事です。貴方の心が一点の曇りも無い綺麗な真実の心になっていくという事です。貴方は一点の曇りもありませんか。親鸞聖人は仏様に見抜かれた自らの姿を「愚禿」と言われました。我々の愚かしい姿をご覧になられたうで、お救いの目当てとしての本当の私に仕上げて下さるのが阿弥陀様です。

(大略)



秋季永代経法要

講師 田中 法文 先生

ご自分のご先祖を十代遡ると何人になるか数えたことがございませぬか？少なくとも一〇二四人。

私がこの娑婆に生まれ出るのに一〇二四人以上のご先祖様のご縁が関わっているのです。その一人が欠けても、私は生まれていません。皆さんもそうです。

「先に生まれんものは後を導き、後に生まれんひとは先を誘え」

私たちは感謝をしていかななくてはなりません。感謝とは、感謝のお念仏のことです。

「聞く他に信心はなく、口から感謝の念仏がでる」と申します。この「感謝の」とはどういうことか、順を追って説明いたします。

「聞く」には自分の都合の良いように聞く「不如実の聞」と、聞いたことを素直に受け入れる「如実の聞」との二通りの聞き方がありますが、浄土真宗の聞とは、如実の聞のことです。

では、何を聞けばいいのでしょうか。親鸞聖人は「仏願の生起本末を聞け」と示されています。阿弥陀さまが私たちを救おうと願いを起し修行されて、私たちのと

ころでお念仏となって成就する、つまり、聞とはお念仏を聞くという事なのです。

次に信心ですが、真宗では如来から賜ったものだ、と考えます。このことを「私たち〓石ころ」と例えた先哲がありました。

川の中に放り込まれ、信心という水の中にひたされていたら、いつの間にか角が取れてまん丸くなる。

阿弥陀さまの願いの中で仏となる身にお育ていただいているという事を、受け入れる(如実の聞)ことが信心なのです。そして願いの中に生かされ、お育てに与っていることへの感謝の気持ちで申すのがお念仏なのです。

念仏の生活とは、感謝の生活のことなのです。このご縁を結んで下さったご先祖様に対して感謝をし、お念仏を慶ぶのが、秋の永代経法要のご縁なのです。(要旨)



報恩講法要のご案内

- ・ 期日 十一月二十三日(日)
- ・ 時間 朝席 九時半よりと 昼席 二時より
- ・ 講師 田中 誠證先生(大分県)
- ・ 朝席終了後午後一時半までお齋(精進料理)があります。

追弔法要のご案内

報恩講の際、昨年十一月より本年十月までに亡くなられた方々の追弔の法要を午前十一時半より勤めます。ご遺族の方の多数のご参加をお待ちしております。

平成二十七年春季彼岸法要

- (〇のある日時にあります)
- ・ 時間 朝席十時よりと 昼席二時より
- ・ 講師 田中 了彩先生(福岡県)

三月	午前	午後
十八日(水)	○	○
十九日(木)	○	吹上
二十日(金)	吹上	
二十一日(土)	○	○
お中日	○	○

花祭り

- ・ 日 四月五日(日)
- ・ 時間 十一時より
- ・ 場所 興照寺本堂
- (和順会総会も合わせて行います)
- ・ ・ ・ 花祭り関係募集 ・ ・ ・

踊り・カラオケ・詩吟・楽器演奏等の参加者を募集します。ふるってご参加ください。

余興参加者

平成27年行事予定

一月	一日	修正会(正月法要)
三月	十八日(水)と二十一日(土) (土:お中日)	春季彼岸法要
四月	五日(日)と二十五日(土)と二十六日(日)	和順会総会・花祭り・帰敬式 春季永代経法要
八月	十三日(木)と十五日(土)	盆 (一部地域は日が違います)
九月	二十日(日)と二十三日(水) (水:お中日)	秋季彼岸法要
十月	二十四日(土)と二十五日(日)	秋季永代経法要
十一月	二十二日(日)	報恩講・物故者追弔法要
十二月	三十一日	除夜会

帰敬式

帰敬式とは法名を受ける式です。法名は本来生前に受けるものです。当寺では、花祭りの際に行っています。是非この機会にお受けください。

帰敬式の受式希望の方、余興参加希望の方は、**三月三十一日まで**にご連絡ください。

日赤への寄付のご報告

毎年八月中に賽銭箱に投ぜられました皆様の浄財を日赤に寄付しております。今年も四四、七九七円集まりました。皆様のご協力に心より感謝いたします。

平成二十七年のご法事

左表の下の年に亡くなられた方が、それぞれの年回忌法要に当たっております。

一周忌	平成二十六年
三回忌	平成二十五年
七回忌	平成二十一年
十三回忌	平成十五年
十七回忌	平成十一年
二十五回忌	平成三年
三十三回忌	昭和五十八年
五十回忌	昭和四十一年

あとがき

今年もあと二ヶ月。気忙しいの中に時をはかりながら生活しなければならぬ虚しさも感じます。電光朝露の命を噛みしめます。